

読むことにおける深層の読みを実現し 「言葉による見方・考え方」を育て鍛えている授業

構造を意識しながら深層の読みを生み出していくレベルの高い授業展開

教師と子どもたちで生み出した学習課題「なぜ松井さんには小さい声が聞こえたのだろうか」をめぐって、質の高い読みが展開された。「松井さんには、こんな声が聞こえました。」の「には」に着目し、蝶たちが他ならぬ松井さんに自分たちの声を聞かせたことに気付き、そこから松井さんの人物像を探っていく。クライマックスと人物像を構造的に関連させた読みである。

子どもたちは、まずタクシーに乗った女の子への松井さんの対応の仕方に着目する。突然乗車した（保護者なしの）子どもを、普通ならタクシーの運転手が受け入れるはずはないということの切り口にして読み深める。

グループの話し合いで「普通なら『一人で来たの?』『お母さんは?』『おうちどこ?』とか聞くはずなのに、松井さんは乗せている。」という読みが生み出される。松井さんから行き先を聞かれて、女の子は「え。ーええ、あの、あのね、菜の花横町ってあるかしら。」と答える。行き先が曖昧なのである。タクシーの運転手としては困るはずである。にもかかわらず松井さんは親切に「菜の花橋のことですね。」と確かめる。これも松井さんのやさしさであると子どもは気付く。さらに、子どもの「早く、おじちゃん。早く行ってちょうだい。」という依頼に「松井さんはあわててアクセルをふむ」箇所を取り上げ、「子どもの言うことを聞いてあげるやさしさ」を読む。

子ども一人なのに、ぞんざいに扱わず大人と同じ扱いをする。それもかなり親切な対応である。そういう松井さんの人物像を解明していく。それが蝶を助けることにつながることに気付いていく。だからこそ、蝶は松井さんにだけ自分たちの声を聞かせたのである。

学習課題の質の高さ、本文にこだわりつつ松井さんの人物像を深めていること、「普通なら～」という観点を重視しながら深めていること、すべて鎌田先生の戦略的な指導による。深層の読み＝「深い学び」を生み出すこれから求められる授業のモデルである。

「言葉による見方・考え方」を意識して育て鍛えた授業

新指導要領では「言葉による見方・考え方」が重視されている。しかし、その内実はまだ未解明である。だから、実際に授業で「言葉による見方・考え方」を働かせることは簡単ではない。もちろん「言葉による見方・考え方」を鍛えることも難しい。

鎌田先生は、「普通ならどうか」「普通ならどういう対応をとるか」という「言葉による見方・考え方」を意識的に子どもたちに使わせている。だから、上に紹介したような深い読みが生まれたのである。

これは、「白いぼうし」を超え、他の物語・小説でも有効に使える。「ごんぎつね」では兵十がごんの行為を神様のものと思ひ込みそうになる。それをごんは「へえ、こいつはつまらないな。」と思う。そう思うなら、もう十分につぐないをしているのだからやめてもいい。普通ならやめるのではないか。ーという問いを立ててみる。すると、それなのに「その明るる日も」ごんが兵十のうちに出かけることの意味が見えてくる。もうつぐないを超え始めているのである。「大造じいさんとガン」も、あれほど苦しめられた残雪をなぜ逃がすのか。普通なら逃がさないだろう。ーというところから読みを深めることが出来る。

「言葉による見方・考え方」が、鎌田先生の授業では確実に育て鍛えられている。